

論文

## 「動機の語彙」論再考

——動機付与をめぐるマイクロポリティクスの記述・分析を可能にするために——

藤原 信行\*

### 1. はじめに——動機付与と意味秩序の修復・再構築をめぐるマイクロポリティクス

本稿の目的は、ミルズ (Mills, C W) の「動機の語彙 (vocabularies of motive)」論および社会学領域におけるその後の〈動機の社会学〉の研究動向を概観することをつうじて、人々が意味秩序 (meaningful order / order of meaning; 詳細は本稿4.1を見よ) を動機付与により主体的に修復・再構築する作業をめぐる〈マイクロポリティクス〉の記述・分析を可能とするかたちに、〈動機の社会学〉の射程を拡張する端緒を得ることにある。具体的には、a) 常識知としての動機を付与することそのもの〈暴力性〉、および動機付与が人々の爾後の言動を規定するという意味における〈暴力性〉、b) 動機付与成立／不成立をめぐる相互行為戦略——a) における暴力性の回避／達成と密接な関係にある——を記述・分析可能なかたちに動機の社会学の射程を拡張する端緒を得ることが、目的となる。

人々が意味秩序の自明さの崩壊に直面することは、アノミー／カオスのただなかに放擲されるに等しい (Berger 1967=1979: 31-6)。すなわちそれに直面することは、世界の自明さが崩壊し、端的に〈わけのわからない〉状況に投げ出され、爾後の適切な言動にかんする指針も得られない、ということである。よって当該状況に陥ったならば、直面する状況の理解を可能にする——意味秩序のなかに位置を与え、統合する——ための説明および爾後の言動にかんする〈適切〉な指針が求められる。とはいえ動揺・混乱に見舞われた意味秩序は、人々が直面する動揺・混乱を生起させる (させた) とされる言動・出来事にたいして事前ないしは事後に〈適切〉な説明としての「動機の語彙」を付与することで、修復・再構成される (Mills [1940]1963=1971; Gerth & Mills 1953=1970) という。

#### 1.1 動機付与の暴力性と動機付与が爾後に与える影響

だが、「動機の語彙」の付与で意味秩序が修復・再構築されるといっても、付与する動機は行為者が好き勝手に選べるものではなく、さまざまな要因により制約を被る。よって不本意な動機を受容もありうる。また、動機付与成立により相互行為が終了するわけではない。なぜならばある言動・出来事にたいする動機付与は、当該状況に関与している人々が次にとるべき (であった) 適切な言動の基準も与える (間山 2002: 155) からである。すなわち、ある言動にたいする動機付与は、爾後の相互行為場面における適切な言動を指示するはたらきをもつ。ゆえに動機付与とは、人々に爾後における特定の言動 (意味づけ) を強要——常に人々の受苦経験の生起や深化を惹起するかは別として——するものである。たとえば、精神医学的言説の広まりによって、近親者の自死に〈うつ病〉なる動機付与を余儀なくされることは、自らを近親者の自死の原因である〈うつ病〉にたいする適切な対応を怠った存在と定義し、自責の念を強化・明確化する意味づけを強いる (藤原 2007a)。

このように動機付与それ自体がときとして暴力性を帯びており、そればかりか人々の爾後の言動を、有無を言わず規定する意味における暴力性を帯びる場合もある。よって動機の社会学は、動機付与の暴力性を問うことが可能でなければならず、くわえて動機付与成立〈後〉に生起する事態も射程におさめている必要がある。

#### 1.2 動機付与成立／不成立をめぐる相互行為戦略

さらに、たとえ意味秩序が動揺・混乱し、動機付与が切実に求められる状況にあっても、その付与が常になされ

---

キーワード：動機の語彙、モティーヴ・トーク、現象学的社会学、ゴフマン、エスノメソドロジー

\* 立命館大学大学院先端総合学術研究科 2006年度入学 公共領域

るわけではない<sup>1</sup>。現実になされない事例も存在する。たとえば自死遺族のなかには、家族員の自死にたいして〈(肉体的・情緒的な) ケアの負担を及ぼすこと〉〈労働をつうじて貢献すること——地域共同体における結ないしはすけあいも含めた——の困難さ〉〈経済的負担を強いること〉への不安や罪障感という、自らが属する共同体内部における自明な動機の付与を、自身やいま共に生きている意味ある他者たちへの非難、死者への責任の付与、ないしは(生きているか否かの違いはあるにせよ)意味ある他者との相互行為そのものの破壊、であるとして回避する者が存在する(藤原 2007b: 309-11)。自死遺族たちは、あらゆる動機の付与を回避し、その結果として意味秩序の修復・再構築が達成されず、アノミー／カオスに直面するぎりぎりの状況に身を置くことで、かろうじてすべての意味ある他者との相互行為を維持している。

さらに言えば、動機付与を回避するだけでなく、その積極的な付与の試みも存在しうる。たとえば、精神医学的言説にもとづいて、中高年既婚男性の自殺に、妻の情緒的ケアの不足という動機を帰属させようとする精神科医(大原 2001)のように。ゆえに動機の社会学は、動機付与成立／不成立をめぐる相互行為戦略を射程におさめる必要がある。

それでは、以下でミルズおよび彼以降の、動機の社会学の動向を概観しよう。

## 2. ミルズ「動機の語彙」論の意義と限界

### 2. 1 類型的な語彙としての動機——動機外在説の源流

「動機の語彙 (Vocabularies of Motive)」とはなにか。それは特定の社会的状況のなかで、行為の正当性を自他にたいして受容させ、かつそれを理解可能とするために言及・参照される類型的な語彙としての動機である。よって「動機の語彙」は人間の言動やその結果生起する出来事の原因ではなく「ある状況に置かれた行為者や他の成員にとって……社会的・言語的行為にかんする問いへの、疑問の余地のない回答」(Mills [1940]1963=1971: 347)として付与されるものである。動機の語彙は他者の行為の理解や自己の行為の正当化が求められる「危機」的状況において必要性が増す(Gerth & Mills 1953=1970: 130)。したがってある言動や出来事に動機を付与するのは、行為主体に限らない。当該状況に参加している他者や観察者も動機を付与する。またある特定の時代・場所において知識として流通し受容されるもののみ使用可能である(Gerth & Mills 1953=1970: 130-1)。そして「動機の語彙」には、統合的および統制的機能が存在する(Mills [1940]1963=1971: 345)。

動機の統合的機能とは、常識知を参照した場合に別様でもありうる、ないしは予想外の行為やプログラムが生起した理由を「動機の語彙」を付与することにより人々に理解させ(意味づけ)る機能である(Mills [1940]1963=1971: 345-9)。動機の統制的機能とは、直面する状況下における(表明しうる動機の)受容可能性、および前述の流通している語彙の制約を媒介として、人々の行為やプログラムにたいする理解(意味づけ)、さらには言動そのものを統制——適切な語彙を付与できる言動を促進し、できない言動を抑制——する機能である(Mills [1940]1963=1971: 348-52; Gerth & Mills 1953=1970: 132-3)。ゆえに、相互行為参与者たちにとってかならずしも望ましいとはいえない動機付与が成立する可能性が遍在していることになる。以上二つの機能により、「現実には用いられている動機は、その行為を明確に状況へと結びつけ、ある人の行為と他者の行為とを統合し……規範にもとづいて、その行為を整合化する」(Mills [1940]1963=1971: 349)。以上の「動機の語彙」のはたらきにより、端的に〈わけのわからない〉事態は回避される。

### 2. 2 動機付与をめぐる戦略

だが、動機付与はたんに〈わけのわからない〉事態を回避するために〈しかたなく〉付与されるだけではない。人が特定の行為を開始し、正当化するために〈戦略的な〉付与が企てられる場合もある。戦略的に動機を付与する必要があるのは、「動機を選択する際の巧拙が、その行為主体の命運を左右する」ゆえに「動機を抜け目なく選択するということは、その状況のなかで、他の成員に行為を動機づけようという企図の重要な要素となる」(Mills [1940]1963=1971: 348)からである。そして動機の戦略的付与は、統合的・統制的機能と密接な関係にある。なぜならば戦略的に付与された動機が「論争を解決し、いろいろな社会的行為を統合する」(Mills [1940]1963=1971: 348)

からであり、また「そこで用いられる動機が特定の傾向の行為を生み出す条件になっている」(Mills [1940]1963=1971: 348) からである。ミルズが、動機付与の成立／不成立をめぐる相互行為戦略に、戦略的な動機付与というかたちで——動機付与の回避ではなく——着目していたことは疑いない。

### 2. 3 動機の知識／歴史社会学という構想——動機付与の状況(文脈)依存性

ミルズは相互行為場面における動機付与にのみ着目していたわけではない。彼は、動機付与の成立を妨げるより広い社会的状況も視野におさめていた。彼とガスによれば、「動機の語彙」の付与が成立しないのは、歴史的・社会的変動——とくに産業化・都市化の進展——にともない、さまざまな動機の語彙のあいだで競合関係が生じ、かつは自明な回答であったものが疑問を付されるようになった場合である(Mills [1940]1963=1971: 351-5; Gerth & Mills 1953=1970: 133-9)。またミルズは、同時代であっても社会階層や集団によって流通し受容される動機の語彙が異なること、人々は自分たちと異なる動機の語彙を信じる個人や集団に否定的評価を下すと述べている(Mills [1940]1963=1971: 351)。さらにミルズとガスは、特権的集団と地位の低い集団との関係を例に挙げ、形式上同一の言動であっても行為者の社会的地位・属性により異なる動機の語彙が付与される<sup>3</sup>ことを指摘する(Gerth & Mills 1953=1970: 133)。要するに、異なる時代に属する、ないしは異なる経験を有する人々のあいだでの動機付与は、語彙としての動機の共有を前提とすることができず、それゆえにつねに葛藤を生じ、成立しない可能性をかかえているのである。

以上をふまえてミルズは「動機は、歴史上の時期と社会構造の異なるにつれて、その内容と性格を変えるものなのである」から、「動機の用語の意味をとりあげ、それらを、歴史上の時期と個々の状況のなかへ、動機の語彙として位置づける」(Mills [1940]1963=1971: 355) ための〈動機の知識／歴史社会学〉を提唱する。なぜならば「動機は、それが適合する語彙をもっているところの限られた社会的状況をはなれては、何らの価値も持たない。それらは状況づけられなければならない」(Mills [1940]1963=1971: 355) からである。

歴史上の時期や社会構造と動機をめぐるコンフリクトを関連づけていることから明らかのように、ミルズが意識していたのは、相互行為場面における動機付与が成立しない場面ではなく、動機付与不成立の背景にある歴史的・(個別的な相互行為場面を越えたより大きな)社会的条件である。それでも、「動機の語彙」の付与=意味秩序の修復・再構築の成否が状況(文脈)依存性であるゆえに予定調和的に成立するとは限らないことを、ミルズは正しく理解していたのである。

### 2. 4 残された課題——動機付与回避の戦略、および動機付与成立〈後〉

ミルズの「動機の語彙」論は、動機を個々人の心理・精神の奥底に蠢く行為の駆動因と見なす通俗的理解および心理学・精神医学的理解——動機内在説——から動機外在説への転換の第一歩となった(杉浦 1998: 93)。すなわち動機を(個人の心理・精神から)外在的に記述・分析する途を拓き、外在論・相互行為論に依拠した社会学的動機研究の事実上の出発点となったのである<sup>4</sup>。人々を当惑させる言動や出来事が生起するたびに〈こころ(心)の闇〉や〈深層心理〉を追究する不毛かつ有害な試み<sup>5, 6</sup>とは一線を画す、生活者の自明な常識知を焦点化した動機研究の途が開かれた、と言ってよい。

またミルズは、常識知としての動機付与により社会的状況において生じた〈わけのわからなさ〉が解消されることに着目し、動機付与が必要とされる条件を明らかにした。さらにミルズは、秩序を動揺・混乱せしめる言動をなした行為主体以外の者たちによる動機付与の遂行——だからこそ動機付与をめぐるミクロポリティクスが生起する——や、人びとによる動機付与が成立しない可能性を射程におさめていたこと、典型的な語彙としての動機の付与が人々の言動を一定方向に整序・統制するはたらきを射程におさめていた。本稿の関心からすれば、以上がミルズの「動機の語彙」論の評価すべき点となる。

しかし、本稿における関心に立ち戻った場合、ミルズの動機論には二つの欠落点が存在するといえる。一点目は、動機付与の成立／不成立をめぐる相互行為戦略にかんする部分である。ミルズは動機付与の戦略には言及しているが、動機付与回避の戦略には言及していない。しかし後者が顧慮されていないことは、動機付与をめぐる相互行為戦略の全体像を射程におさめられないことを帰結する。たしかにミルズは動機付与不成立がありうることを理解し

ていた。だが彼によれば、動機付与の不成立はあくまで歴史的・マクロ社会的な背景によるものであり、個別の相互行為場面で採用された戦略によるものではない。ミルズの「動機の語彙」論では、動機付与回避のための相互行為戦略は顧慮されていない。

そして二点目は、動機付与の暴力性と関係しての、動機付与の成立／不成立（後）の問題である。ミルズは1) 個別具体的な社会的状況において説明を要する言動・出来事の生起→2) 「動機の語彙」の付与→3) 〈わけのわからなさ〉からの解放（もしくは動機付与の不成立）、というシークエンスのなかに「動機の語彙」論の射程を限定している。彼は動機の統制的機能に言及することにより、行為者にとってかならずしも望ましいとはいえない動機付与が成立する可能性までは射程におさめていた。だが動機付与の成立（後）に生起する事態を射程におさめておらず、動機付与をめぐる暴力性を顧慮するには道半ばである。くわえて、動機付与不成立後に生起する事態も射程におさめていない。

では、その後の研究動向のなかで、(本稿における問題意識からみた)「動機の語彙」論の有する意義と課題は、いかに扱われたのだろうか。

### 3. モティーヴ・トーク論の展開とその問題点

その後「動機の語彙」論は、〈意味〉や〈相互行為〉に焦点を当てた現象学的社会学、ゴフマンの社会学、エスノメソドロジー、シンボリック相互作用論の登場により、生活世界における意味秩序／相互行為秩序<sup>7</sup>の修復・再構築過程を記述・分析する理論的道具立てとして再評価されることとなった(西川 1991: 68-9; 井上 1997: 28-31)。「動機の語彙」論を直接継承したのは、シンボリック相互作用論を中心に展開された「モティーヴ・トーク (motive talk)」論と呼ばれる諸研究であった(井上 1997: 28-31)。

#### 3. 1 ミルズ動機論の再評価——「モティーヴ・トーク」論

ミルズの「動機の語彙」論の再評価は、スコットとライマン (Scott, M B & S M Lyman) の "Accounts" (アカウント: 弁明／弁解) 論文によって開始された(井上 1997: 29)。アカウントとは、意味秩序ないし相互行為秩序を混乱・動揺せしめる出来事・言動にたいする事後的な弁明を可能にする語彙の諸類型である (Scott & Lyman 1968: 46)。スコットとライマンの議論の焦点は、杉浦郁子の簡潔な要約によれば「①アカウントのサブタイプやイデオムの提示、②アカウントが受容される条件としての人びとの背後期待の作用、③アカウントが呈示される状況の特徴とアカウントの適合性、④アカウントの付与を回避するために人びとが用いる戦略、⑤アカウント付与過程におけるアイデンティティ・ネゴシエーション」(杉浦 1998: 93) である。ことに②から⑤は「ミルズが比較的軽視した視点」(杉浦 1998: 93) であった。またブラムとマクヒュー (Blum, A F & P McHugh) は、動機を付与し受容するさいの背後期待を精緻化し「動機の深層構造 (deep structures of motives)」の概念 (Blum & McHugh 1971) を提示した。さらにヒューイトとストークス (Hewitt, J P & R Stokes) は、常識知に依拠した場合に否定的な評価を付与されるであろう行為を事前の正当化する「事前否認 (disclaimers)」を可能にする語彙の諸類型を提示した (Hewitt & Stokes 1975)。「モティーヴ・トーク」論の理論的枠組みは、これにより出揃ったといえる。

#### 3. 2 動機の状況適合性と動機付与回避の戦術

スコットとライマンは②と③において、ゴフマンやエスノメソドロジーに学び、相互行為場面における動機付与の成立／不成立を規定する要件を詳述した。その要件とは、個々人が属する文化／サブカルチャーを基盤とする背後期待にもとづいて判断される、付与された動機の状況適合性である (Scott & Lyman 1968: 52-5)。

しかし本稿における関心からみればあいに重要なのは、スコットとライマンにおける④、すなわち動機付与回避の戦術である。これはミルズにおいて完全に欠落しているが、動機付与をめぐる相互行為戦略の記述・分析を完全なものとするためには不可欠であるからだ。スコットとライマンは、他者からの動機付与を回避する技法として、「煙に巻くこと／神秘化」(mystification)、「ほかのなにかを参照すること」(referral)、そして「アイデンティティの切り替え」(identity switching) の三つを挙げる (Scott & Lyman 1968: 57-8)。

一つめの「煙に巻くこと／神秘化」とは、たとえば「長い話になりますが……」と述べてそれ以上の弁明を回避しつつ、他者による動機付与の機会も同時に断ち切る技法である (Scott & Lyman 1968: 57)。くわえて (宗教および政治的な) カリスマ的指導者や (医療などの) 専門職従事者が、信奉者や顧客／患者との情報や知識量の落差、および後者が前者に抱く一方的な信頼を利用して、適当に話をごまかすこと (Scott & Lyman 1968: 58) も含まれる。

二つめの「ほかのなにかを参照すること」とは、たとえば病にあるとされる者や従属的地位にある者が、自らの言動の原因を (担当医による) 診断や上位にある者の命令のような、より権威のあるものに帰属させることである (Scott & Lyman 1968: 58)。より権威のあるものには、学術的な報告のような専門知一般も含まれる (Scott & Lyman 1968: 58)。

三つ目の「アイデンティティの切り替え」とは「あらゆる人びとがアイデンティティの複数性を有するようになって以来、容易に利用可能となった」(Scott & Lyman 1968: 58) 技術である。(彼らによる論文内の例ははなはだジェンダー・センシティブでないが) たとえば夫の浮気を (母親の立場から) 父親役割の不履行と非難する妻の動機付与を、夫が男性役割——男／女の役割分化を前提に、浮気は男の甲斐性で女が文句を言う筋合はないとする——に依拠して斥けるように、相互行為場面で他者の動機付与の前提となるアイデンティティを切り替え、その動機付与を無効にする戦略である (Scott & Lyman 1968: 58)。

これらの動機付与回避の戦術は、ミルズにおいて完全に欠落していた部分を補い、動機付与をめぐる相互行為戦略のより完全な記述・分析を可能とするものである。しかしながらこの動機付与回避の戦術は、位置づけいかんによっては動機付与が有する暴力性を記述・分析することの妨げとなりかねない。なぜならば、ある行為主体、とくに階層的・文化的に劣位に立つものにとって不都合な動機付与を、この戦術を駆使してことごとく回避できるならば、動機付与はその暴力性を発揮する余地がなくなるからである。

最後になるが、このモティーヴ・トーク論の理論的展開においても、いまだに動機付与成立／不成立〈後〉に生起する事態まで射程が延伸されていないことを付け加えておく。

### 3. 3 実証研究の展開——動機の社会学的研究における射程の縮小

上述した理論的展開を受けた実証研究も蓄積されるようになった。強姦罪で収監された者が〈自分はレイプ犯ではない〉という自己定義を可能にするアカウント (Scully & Marolla 1984)、閉鎖的な地域共同体において親族・友人らを殺害し有罪宣告を受けた失業者・非正規雇用労働者による責任軽減のためのアカウント (Ray & Simons 1987)、講義欠席の責任を軽減せんと試みる大学生のアカウント (Kalab 1987)、年長男性との性交により十代で未婚の母となったことにたいする道徳的非難を斥けようとする高校生のアカウント (Higginson 1999)、母性イデオロギーにもとづく母乳養育礼賛のなかで、次に生まれる子どもの人工栄養での養育を望む母親による事前の正当化 (Murphy 2004) などである。これらの実証研究はすべて、周囲の他者を当惑させ秩序を動揺・混乱させる言動が、当該行為主体による動機付与により〈合理化〉される過程——動機付与が成立せず、言動が正当化されず秩序が修復・再構築されない過程ではない——の記述・分析である<sup>8</sup>。

これらモティーヴ・トーク論における実証研究は、事前ないしは事後の行為にたいする他者——「一般化された他者」も含む——からの否定的反作用により動揺・混乱する行為主体の意味秩序が、動機付与により修復・再構築されるまでの過程に焦点を当てた研究である (西川 1991: 69-70; 井上 1997: 28-31)。よってこれらの諸研究は、動機付与成立〈後〉を射程におさめることはない。またそれらの諸研究は共通して「動機の付与の成立と秩序の回復を前提」としている (西川 1991: 74)。その結果として、動機付与をめぐる相互行為戦略における、動機付与回避過程の独自性を記述・分析することができなくなった。より正確に言えば、他者による動機付与 (= 反作用) を回避することと、行為主体による動機付与の達成を分析上分離せず、すべて後者にまとめてしまったのである。さらに、動機付与回避とは無関係に生ずる動機付与不成立という事態を記述・分析できない——そもそも顧慮していない——ことにもなった。

くわえて、動機付与により行為主体の動機付与のみ成立する側面にばかり記述・分析したこと、および動機付与成立／不成立後を射程におさめていないことは、動機付与の暴力性を記述・分析するうえでマイナスとなった。な

ぜならば、動機付与が特定の状況の定義の受容を強いるように統制されうること、およびその結果として爾後の局面で特定の言動を余儀なくされうるという意味においての暴力性を記述・分析する余地を消失させたからだ<sup>9</sup>。そればかりか、他者による動機付与を反作用としてのみ扱ったため、ミルズにおいて意識されていた、他者による動機付与の記述・分析を射程におさめることも不可能となった。

モティーフ・トーク論における実証研究は、実質的にミルズの動機論が有し、その後の理論的展開が新たに用意した道具立てを十全に活用することもなく、またそれらの理論の射程を拡張することに資するところもなかったと結論づけられる。この事実は、それらの研究に影響を与えた現象学的社会学、ゴフマンの社会学、エスノメソドロギーからも学ぶところがなかった、ということも意味する。

#### 4. 動機論としての現象学的社会学・ゴフマンの社会学・エスノメソドロギー<sup>10</sup>

先に言及したように、現象学的社会学、ゴフマンの社会学、エスノメソドロギーは動機の社会学の再評価に大きな影響を与えた。以下において、ミルズの動機論やその後のモティーフ・トーク論における理論的展開をさらに発展させ、かつ積み残した課題——動機付与成立〈後〉の事態まで射程におさめるかたちで動機付与の暴力性をより完全なかたちで記述可能にすること、および動機付与不成立〈後〉の事態も記述可能とすること——を解決するうえで現象学的社会学、ゴフマンの社会学、エスノメソドロギーから学ぶものを明らかにしてゆく。

##### 4. 1 現象学的社会学における動機論——意味秩序の護り手としての「正当化図式」

現象学的社会学の創始者であるシュッツは、動機を行為主体が「企図のなかであらかじめ空想的に想像されている事態」としての「目的動機」と、行為主体が「実際に行った行為をするように彼を規定している、彼の過去の諸経験」を説明する「理由動機」とに区別した (Schutz 1962=1983: 71-2)。そして彼は両者とも「所与の行為経路を規定」する「他者の行動を典型的に予期することから成るひとつの構成概念」であるとしている (Schutz 1962=1983: 75-6)。動機を典型的な語彙ととらえるミルズと同一の観点である。

上述のシュッツの議論を継承・発展させたバーガー (とluckマン) は、社会的に類型化された知識による意味秩序の修復・再構築過程に着目した。これが「動機の語彙」論の再評価へとつながった (西川 1991: 69)。意味秩序とは、人々を意味喪失 (カオス) の危険から護り、彼/彼女らの自明なリアリティとアイデンティティを保証する装置である (Berger 1967=1979: 33)。意味秩序が維持されている状態とは「われわれの経験と解釈にとっては所与」の世界 (Schutz 1962=1983: 55-6; 57-8) およびその核心部分である「いままで通りの考え」 (Schutz 1964=1991: 138) <sup>11</sup>の自明さが維持されている状態、を指す。

意味秩序は「いままで通りの考え」に代表される社会的な知識を媒介とした他者との相互行為と、その解釈をつうじて不断に構築され続けている (Berger 1967=1979: 23-5)。よって意味秩序はすぐれて相互主観的である。しかし、意味秩序は限界状況——リアリティとアイデンティティの自明さを覆す事態——を惹起するカオスのなかで辛うじて存立しているにすぎない (Berger 1967=1979: 33-6)。

バーガーとluckマンは、脆弱な「制度的秩序」(意味秩序)の自明さを護るものとして「正当化図式」を挙げる。「正当化図式」には、a)「なぜ彼がある行為を行うべきであり、他の行為は行うべきでないか」を指示する規範的要素と、b)「なぜ事柄がこうなっているのか、を教え」る認知的要素に分化しており、後者は前者の前提となる (Berger & Luckmann 1966=2003:143-4)。その「正当化図式」は、言語化され人々に継承される類型化された「語彙」として存在する (Berger & Luckmann 1966=2003:144)。よってバーガーとluckマンにおける「正当化図式」とは、意味秩序の自明さを正当化する類型化された言語的資源であり、ミルズのいう「動機の語彙」と同様のはたらしを有する。であるならば、動機付与はきわめて切実な課題であり、それを回避するための相互行為戦略は意味秩序の修復・再構築を妨げかねないというリスクをとまなうこととなる。

井上俊は彼らの所説を敷衍し、意味秩序はa)行為の責任の宛先を確定し、いかに振る舞えば良い(良かった)/いかなる振る舞いが悪い(悪かった)か、の指針を与えるものとしての「規範的秩序」の水準、およびb)'事象が生起する際の因果関係にかかわる「つじつまのあった説明」としての「認知的秩序」の水準に区分でき、かつ後者

が基底の水準にあるとする（井上 1997: 32-5）。よって生起する／した言動・出来事に付与される動機は、認知的水準において説得的であるものが選ばれ、規範的秩序の水準において自らにとって不都合な状況定義を招来せざるをえない場合もある、という（井上 1997: 33-4）。

現象学的社会学は、類型化された語彙としての「正当化図式」の付与が意味秩序を修復・再構築するとしており、ミルズと近似した発想を有している。また、動機付与不成立、すなわち意味秩序修復・再構築の破綻がカオス／アノミーにほかならないことを指摘し、動機付与不成立後に生ずる事態を明らかにしたばかりか、動機付与回避の相互行為戦略が行使されるうえでのリスクも明らかにした。さらに、意味秩序が規範的秩序と認知的秩序に分かれ、後者が基底の水準にあると指摘することで、動機付与の暴力性が生起するメカニズムの一端を解明し、かつミルズにおいて欠落していた動機付与成立〈後〉への射程の拡大——爾後に不都合な状況定義の受容を強いられる——への道筋を示すこととなった。

#### 4. 2 ゴフマンの社会学<sup>12</sup>における相互行為秩序と秩序維持活動としての〈排除〉

ゴフマンの社会学は相互行為場面とそこにおける秩序維持活動に着目していた。このことも「動機の語彙」論への再評価をうながすこととなった（西川 1991: 68-9）。

ゴフマンによれば、「緊張」や「気まずさ」を回避するために人々が互いにさまざまな技法・儀礼を行使する過程をつうじて、対面的な相互行為場面における秩序が辛うじて維持されている（Goffman 1961=1985; 1967=2002）。だが秩序はささいな、そして意図せざる失態により混乱・動揺をきたす（Goffman 1961=1985: 39-57）。これにたいして人々は「特別に適切な言葉と行いを付与することによって、これらの当惑すべき事柄を公式に受け入れられるような仕方」で当該場面に統合する（Goffman 1961=1985: 42-3）ことで、相互行為秩序の混乱・動揺を鎮めることができる。そればかりではなく、当該相互行為場面における秩序の顕現としての状況の定義は、当該場面にふさわしくない要素——動機付与を含むさまざまな言葉や行い——を変形・排除する「変形ルール（transformation rule）」ないしは「相互行為膜（interaction membrane）」のはたらきにより維持・再構築が達成されている（Goffman 1961=1985: 18-24; 62）。秩序維持のために、動機付与（を含むさまざまな言葉や行い）が統制を受けているのである。

では、動機付与をめぐる統制に服さない者はどうなるのか。彼／彼女は、秩序維持のために不都合だとされ、相互行為の場から（精神病院などへ）排除される（Goffman 1963=1980: 267）。人々は排除を恐れ、容易に不本意な動機付与とそれが招来する状況定義を受容する。ゴフマンは「人が物事の秩序づけられる特定の流儀を嬉々として受容する背後には……[秩序への]反乱者と見なされることを受容した場合の現実ないしは想像上のコストという、身も蓋もない事実が存在する……個人が惨めな相互行為上の協定を公然と受容するという、落胆させられるほど[優れた]理解力を示すという事実はいささかも疑いない」（Goffman 1983: 6; 角カッコ内は筆者による加筆）とその現実を描写している。

ゴフマンの社会学は、人々による不断の相互行為により相互行為秩序が構築されているという現象学的社会学に近似した発想を有している。そしてなんらかの言語的・非言語的シンボル——動機も含まれる——の付与により動揺・混乱する相互行為秩序が修復・再構成されるというミルズの動機論や現象学的社会学に近似した発想も有している。

さらに、人びとの動機付与が統制されており、統制に服さない者は相互行為から排除されることも明らかにした。この排除を回避するためには、人びとはときとして不本意な動機付与と、それが爾後に招来する不本意な状況定義を受け入れざるをえないことも明らかにした。この点は、ミルズにおいて未だ道半ばであった動機付与の暴力性により完全な記述・分析——動機付与成立〈後〉まで射程におさめた——への道筋を示している。

#### 4. 3 エスノメソドロジーにみる動機付与という暴力

エスノメソドロジーにおいても、人々による不断の相互行為により秩序が達成（構築）されていることが前提とされている。ガーフィンケルは、相互行為秩序は「背後期待（background expectancies）」を想定して振る舞い、かつ他者の反作用を理解することをおして遂行される相互行為によってその都度構築されるものであり、あらか

じめ共有されたルールによって人々の行為が設定されているために達成されるものではない (Garfinkel 1964=1995: 34-45) と指摘する。にもかかわらず個別具体的な相互行為場面において秩序が達成される過程を、エスノメソドロジーは記述・分析するのである。

しかしながら本稿の関心から見た場合におけるエスノメソドロジーの重要性は、他者による恣意的な動機付与の〈暴力性〉、およびそれが個人にある特定の状況定義を強要する〈暴力性〉を射程におさめていることにある。サックスは、旧約聖書に登場するヨブに以下のように言及することで、それらの暴力性を指摘する (Sacks [1992]1995: 20; 角カッコ内は筆者による加筆)。

ヨブは裕福かつ品行方正である。だが、彼はすべてを失ってしまう。彼はなにも悪いことをしていないのだから、これは「罰」などではない。にもかかわらず彼の友人たちは「おまえがしでかした悪事を白状しろ。そして一切切悔い改めろ」と責め立てる。友人たちに言わせれば、彼の苦痛と喪失は、彼がなにか悪事をはたらいた十分な証しなのである。友人たちが見るところの問題は、彼が過去の悪事を認めようとしないうことである……ヨブは [してもいない] 悪事を認めることはなかった……だが [現実には] 人は、[周囲からのそのような] 扱いが生じたならば、その扱いが自らの行為にかかわるものであることを、発見してしまう。

本稿の関心に引きつけて言えば、説明を要する言動・出来事への動機付与は、その言動・出来事に関係する人々 (の誰か) にその理由 (原因) と道徳的評価を遡及的に与え、さらに彼／彼女が爾後に行うべき言動を指示する、二重のはたらきを有している。動機付与は「その行為を明確に状況へと結びつけ、ある人の行為と他者の行為とを統合し……規範にもとづいて、その行為を整合化する」(Mills [1940]1963=1971: 349) ことで、人々にある特定の状況定義の受容を強要するのである。さらに、人々は動機付与により強要された特定の状況定義と適合的な言動、たとえば悔い改めることを、爾後において強いられる。

エスノメソドロジーは、人々による不断の相互行為により秩序が維持・再構築されているという、現象学的社会学・ゴフマンに近似した発想を有している。また行為者たちによる動機 (ルール) の共有を秩序達成 (構築) の前提とできないという、ミルズにおいてはまだ明確に打ち出されていなかった視座が徹底されている。そして、動機付与成立後も射程におさめるかたちで、動機付与が有する重層的な暴力性——ある動機が強要されることと、その動機が人々にある特定の状況定義の受容を強いること——をも明らかにした。ゴフマンと同様、この点がミルズにおいて未だ道半ばであった動機付与の暴力性の、より完全な記述・分析——動機付与成立 (後) まで射程におさめた——への道筋を示している。

## 5. 動機の社会学の再構成に向けて

本稿の目的は、動機付与をめぐるマイクロポリティクスの記述・分析を可能にするかたちに〈動機の社会学〉を再構成する端緒を得ることにあつた。すなわちミルズの「動機の語彙」論における欠落点である動機付与回避のための相互行為戦略、および動機付与の成立／不成立 (後) をよりよく論じうる理論的道具立てはなにかを指摘することであつた。

ミルズの動機論を直接継承した「モティーヴ・トーク」論は理論的展開のなかで、動機付与回避の相互行為戦略を具体化なものとした。だが動機付与成立／不成立後を射程におさめるにはいたらなかった。また、動機付与回避の相互行為戦略ばかりが強調された場合、動機付与の暴力性を記述・分析することの妨げとなるという新たな課題も出来た。

現象学的社会学・ゴフマンの社会学・エスノメソドロジーは、ミルズの動機論と基本的な視座を一定程度共有している。そしてこれらの社会学理論は、動機の社会学が積み残している課題の解決にいくつかの端緒を与えてくれる。

現象学的社会学は、意味秩序が規範的秩序と認知的秩序に分かれ、後者が基底的水準にあることを指摘することで、動機付与の暴力性が生起するメカニズムの一端を解明し、かつミルズにおいて欠落していた動機付与成立 (後)

への射程の拡大——爾後に不都合な状況定義の受容を強いられる——に向けた道筋を示した。さらに（ミルズの「動機の語彙」論では顧慮されなかった）動機付与と不成立後に生ずる事態とは、カオス／アノミーにほかならず、それを回避するために動機付与による意味秩序修復・再構築が必要となることを明らかにした。このことで動機付与回避の戦略が有するリスクも明らかとなった。

ゴフマンの社会学は、人びとの動機付与が統制されており、統制に服さない者は相互行為から排除されかねないことを指摘する。この排除を回避するために、人びとはときに不本意な動機付与と、それが爾後に招来する不本意な状況定義を受け入れざるをえないことも指摘した。この点は、ミルズにおいて未だ道半ばであった動機付与の暴力性のより完全な記述・分析——動機付与成立（後）まで射程におさめた——への道筋を示している。

エスノメソドロジーは、ある言動・出来事に動機を付与することが、言動・出来事に関係する人々（の誰か）にその理由（原因）および道徳的評価を与え、さらに彼／彼女がこれから行うべき言動を指示することを指摘する。すなわち、エスノメソドロジーはゴフマンの社会学と同様に、動機付与の重層的な暴力性——ある動機が強要されることと、その動機が人々にある特定の状況定義の受容を強いること——を射程におさめている。

ゆえに、現象学的社会学、ゴフマンの社会学、エスノメソドロジー（さらに今回言及できなかったシンボリック相互作用論）における上述の視座をより詳細に検討し、その結果をミルズの「動機の語彙」論に整合的に接続することが、今後の課題となる。

## 註

- 1 杉浦郁子は、社会学的動機研究が、人々は不都合な言動・出来事が生じた場合、常に動機付与を企てることを前提としている、と批判する（杉浦 1998: 101）。
- 2 ほかに「分類的功能」が存在するとされている（Mills [1940]1963=1971: 345）。しかしそれは「社会的行為の言語的要素として……対象の区別を可能にすることによって、行為を方向づける」（Mills [1940]1963=1971: 349; 傍点は筆者による）ものであり、統合的・統制的機能と分けて論ずる必要性は低い。
- 3 行為者の社会的地位・属性により、同一の言動に異なる動機が付与されるという発想は、ラベリング理論の「恣意的ラベリング」（Becker 1963=1993）と近似している。
- 4 スペクターとキツセは、自分たちの議論がミルズの「動機の語彙」論の影響を受けていることを明言している（Spector & Kitsuse 1977=1990: 143-6）。
- 5 ミルズは、1940年前後のアメリカにおける、精神科医のような「動機販売業」が隆盛する現状を批判している（Mills [1940]1963=1971: 349; 351; 354-5; 西川 1991: 71-2）。
- 6 後年ミルズ（とガース）は、個々人の心的構造に統合された『「ほんとうの」動機』の探究を志向するようになった（Gerth & Mills 1953=1970: 134-43）。そのため「動機の語彙」論は動機内在論に後退した、と見なされている（西川 1991: 72-3）。
- 7 モティーヴ・トーク論における意味秩序と相互行為秩序の区別は曖昧である（西川 1991: 68-9; 76）。
- 8 「中和の技術（techniques of neutralization）」とは、ドミナントな価値規範からすれば他者から否定的なサンクションが下されかねない言動を遂行する場合に、行為主体がなんらかのレトリックを事前ないしは事後に付与して自らの言動を正当化し、罪障感を軽減する技術である（Sykes & Matza, 1957）。自己の言動を正当化するための選択的なレトリック付与なる発想は、ミルズにおける選択的・戦略的な動機付与という発想（Mills [1940]1963=1971: 348）と酷似している。またモティーヴ・トーク論の諸研究において、「中和の技術」論はひんばんに言及・引用されている（Scott & Lyman 1968: 51; Scully & Marolla 1984: 530; Kalab 1987: 74; Higginson 1999: 26; Murphy 2004: 131）。「中和の技術」論がモティーヴ・トーク論に与えた影響は今後詳細に検討されるべきであろう。
- 9 モティーヴ・トーク論における実証研究の有する問題点は、カルロス・カスタネダの研究成果を誤読した研究が流布した「あまりにも安易に現実の構築作業……を停止させたり、変形できるかのようなニュアンス」（山田 2000: 89-90）と酷似している。
- 10 現象学的社会学・ゴフマン・エスノメソドロジーは、動機の社会学としてみればあい共通点が多い反面、共約不可能な相違点も存在する。たとえば、現象学的社会学の分析対象は時間・空間の水準において多元的に構成された生活世界であるが、ゴフマンやエスノメソドロジーの分析対象はおおむね共時的な対面的相互行為である。また、ゴフマンはあらゆる相互行為を機能的観点から分析する点において、現象学的社会学やエスノメソドロジーと異なる。これらの相違点の記述・分析は今後の課題としたい。
- 11 「いままで通りの考え（thinking as usual）」とは、「社会的世界を解釈するための、またいかなる状況においても望ましくない結果は避けながら最小限の努力で最良の成果を得るように事物や人間を取り扱うための、信頼に値する処理法（recipes）に関する知識」として日常生活世界における活動の指針となり、かつ「面倒な探究の手間を省き、到達することの困難な真理を安楽なわかりきった理屈に置

き換え、疑う余地のあることを自明なことで代用する」ことで世界の自明さの維持に貢献する、常識知の体系である (Schutz 1964=1991: 137-9)。

- 12 ゴフマンにおいて、身体 (が発する非言語的情報) は重要な位置を占める (草柳 2002: 120-2)。だがそれは本稿の関心を越えるものであり、ここでは言及・検討できない。

## 文献

- Becker, H L, 1963, Outsiders: Studies in Sociology of Deviance, New York: The Free Press. (=1993、村上直之訳『アウトサイダーズ——ラベリング理論とはなにか [新装版]』新泉社。)
- Berger, P L, 1967, The Sacred Canopy: Elements of a Sociological Theory of Religion, New York: Doubleday & Co. (=1979、藺田稔訳『聖なる天蓋——神聖世界の社会学』新曜社。)
- Berger, P L & T Luckmann, 1966, The Social Construction of Reality: A Treatise in the Sociology of Knowledge, Garden City: Doubleday & Co. (=2003、山口節郎訳『現実の社会的構成——知識社会学論考』新曜社。)
- Blum, A F & P McHugh, 1971, "The Social Ascription of Motive," American Sociological Review, 36 (1) : 98-109.
- 藤原信行、2007a、「遺族による近親者の自死の意味づけとその困難——精神医学的言説が参照されたとき」第23回日本社会病理学会報告原稿。
- 藤原信行、2007b、「近親者の自殺、意味秩序の再構築、動機の語彙」『Core Ethics』3: 301-13。
- Garfinkel, H, 1964, "Studies of the routine grounds of everyday activities," Social Problems, 11 (3) : 225-50. (=1995、北澤裕・西阪仰訳『日常活動の基盤——当たり前を見る』北澤裕・西阪仰訳『日常性の解剖学——知と会話』マルジュ社、31-92。)
- Gerth, H H & C W Mills, 1953, Character and Social Structure: The Psychology of Social Institutions, Harcourt: Brace & World Inc. (=1970、古城利明・杉森創吉訳、『性格と社会構造——社会制度の心理学』青木書店。)
- Goffman, E, 1961, Encounters: Two Studies in the Sociology of Interaction, Indianapolis: Bobbs-Merrill. (=1985、佐藤毅・折橋徹彦訳『出会い——相互行為の社会学』誠信書房。)
- Goffman, E, 1963, Behavior in Public Places: Notes on the Social Organization of Gatherings, Glencoe: The Free Press. (=1980、丸木恵祐・本名信行訳『集まりの構造——新しい日常行動論を求めて』誠信書房。)
- Goffman, E, 1967, Interaction Ritual: Essays on Face-to-Face Behavior, New York: Doubleday & Co. (=2002、浅野敏夫訳『儀礼としての相互行為——対面行動の社会学 (新訳版)』法政大学出版局。)
- Goffman, E, 1983, "The Interaction Order: American Sociological Association, 1982 Presidential Address," American Sociological Review, 48 (1) : 1-17.
- Hewitt, J P & R Stokes, 1975, "Disclaimers," American Sociological Review, 40 (1) : 1-11.
- Higginson, J G, 1999, "Defining, Excusing, and Justifying Deviance: Teen Mothers' Accounts for Statutory Rape," Symbolic Interaction, 22 (1) : 25-44.
- 井上俊、1997、「動機と物語」井上俊ほか編『岩波講座現代社会学1 現代社会の社会学』岩波書店、19-46。
- Kalab, K A, 1987, "Student Vocabularies of Motive: Accounts for Absence," Symbolic Interaction, 10 (1) : 71-83.
- 草柳千早、2002、「相互行為における秩序と身体——ゴフマン相互行為論のまなざし」伊藤勇・徳川直人編『相互行為の社会心理学』北樹出版、103-22。
- 間山広朗、2002、「概念分析としての言説分析——『いじめ自殺』の〈根絶=解消〉へ向けて」『教育社会学研究』70: 145-63。
- Mills, C W, [1940]1963, "Situated Actions and Vocabularies of Motive," I L Horowitz ed., Power, Politics, and People: The Collected Essays of C. Wright Mills, Oxford, London & New York: Oxford University Press, 439-68. (=1971、田中義久訳「状況化された行為と動機の語彙」青井和夫・本間康平監訳『権力・政治・民衆』みすず書房、344-55。)
- Murphy, E, 2004, "Anticipatory Accounts," Symbolic Interaction, 27 (2) : 129-54.
- 西川珠代、1991、「社会学における『動機』概念の変容——ウェバーの動機理解と『動機の語彙』論」の動機付与」『ソシオロジ』36 (1) : 63-79。
- 大原健士郎、2001、『働き盛りのうつと自殺』創元社。
- Ray, M C & R L Simons, 1987, "Convicted Murderer's Accounts of Their Crimes: A Study of Homicide in Small Communities," Symbolic Interaction, 10 (1) : 57-70.
- Sacks, H, [1992]1995, "On Suicide Threats Getting Laughed off," G Jefferson ed., Lectures on Conversation Volumes 1 & 2, Cambridge: Blackwell, 12-20.

- Schutz, A, 1962, "Common-Sense and Scientific Interpretation of Human Action," M Natanson ed., Collected Papers I: The Problem of Social Reality, The Hague: Martinus Nijhoff, 3-47. (=1983、那須壽訳「人間行為の常識的解釈と科学的解釈」渡部光・那須壽・西原和久訳『アルフレッド・シュッツ著作集第1巻——社会的現実の問題 [I]』マルジュ社、49-108。)
- Schutz, A, 1964, "The Stranger: An Essay in Social Psychology," A Brodersen ed., Collected Papers II: Studies in Social Theory, The Hague: Martinus Nijhoff, 91-105. (=1991、渡部光訳「よそ者——社会心理学の一試論」渡部光・那須壽・西原和久訳『アルフレッド・シュッツ著作集第3巻——社会理論の研究』マルジュ社、133-51。)
- Scott, M B & S M Lyman, 1968, "Accounts," American Sociological Review, 33 (1) : 46-62.
- Scully, D & J Marolla, 1984, "Convicted Rapists' Vocabulary of Motive: Excuses and Justifications," Social Problems, 31: 530-44.
- Spector, M & J I Kitsuse, 1977, Constructing Social Problems, Menlo Park: Cummings Publishing Co. (=1990、村上直之・中河伸俊・鮎川潤・森俊太訳『社会問題の構築——ラベリング理論をこえて』マルジュ社。)
- 杉浦郁子、1998、「『動機』はどのように観察されるか——カミング・アウトの動機の語彙を題材に」『現代社会理論研究』8: 93-104。
- Sykes, G M & D Matza, 1957, "Techniques of Neutralization: A Theory of Delinquency," American Sociological Review, 22 (6) : 664-70.
- 山田富秋、2000、『日常性批判——シュッツ・ガーフィンケル・フーコー』せりか書房。

## The Debate over Mill's Vocabularies of Motive: The Politics of the Ascription of Motives

FUJIWARA Nobuyuki

Abstract:

Mills' concept of 'vocabularies of motive' virtually established the sociological study of motives. Mills, however, neglected our tendency to sometimes avoid, or reject, motives ascribed to us. He, moreover, overlooked what happens after motives are placed upon individuals.

The former problem was resolved by the idea of 'strategies for avoiding accounts' in the 'motive talk' concept of Scott and Lyman. Unfortunately, studies following the insight of 'motive talk' were flawed because they, regrettably, provided the mistaken image that we can easily change our order or reality by ascribing motives convenient for ourselves to others.

The latter problem might be resolved by phenomenological sociology, Goffman and ethnomethodology. Phenomenological sociologists have explained the necessity of ascribing motives to others when faced by untoward actions and consequences. Phenomenological sociologists have pointed out that we have to reconstruct the 'plausibility structure' of our life-worlds by ascribing appropriate motives when the structure is damaged by untoward actions and consequences. Goffman and ethnomethodologists have shown that the ascription of motives is an act of symbolic violence that determines both the interpretation of past actions and our selection of suitable future actions. Mills' thought of 'vocabularies of motive' must be reconstructed using these insights from phenomenological sociology, Goffman and ethnomethodology.

Keywords: vocabularies of motive, motive talk, phenomenological sociology, Goffman, ethnomethodology